



けんじょうのしょうじ

賢聖障子に画かれている賢人 一張良一



紫宸殿の母屋中央にある高御座の後ろには、賢聖障子が立てられています。賢聖障子は、中国の賢人が画かれている襖障子で、母屋と北廂の間にはめ込まれています。南面の9間の中央には獅子・狛犬と負文亀ふぶんき（神亀文を負って出現した瑞祥を表すという亀）が画かれ、他の8面には柱間1間につき4名の賢人が画かれています。人物の上部には色紙があり、賢人の名前や功績などが書かれています。一方、障子の北面（裏側）には、にしきかちょう錦花鳥（写真：右）が画かれています。



賢聖障子は嘉永の大火による類焼を免れたので、安政度御造営の折には寛政度にひろゆき住吉広行によって画かれた障子の一部を住吉弘貫ひろつらが繕い使用されました。現在の紫宸殿には昭和41～45年にかけて模写されたものが置かれています（寛政度に製作された賢聖障子は京都御所内収蔵庫で保管）。



賢聖障子に画かれている張良(中央)

この賢聖障子に画かれている賢人のうち、張良について紹介したいと思います。

紫宸殿母屋の東から2間目の面の右から3番目に画かれている人物が張良です。蕭何、韓信と共に「漢の三傑」の一人に挙げられる張良は、韓の再興をおこなうため始皇帝の暗殺を目論むが失敗し、改名して逃亡を試みました。その後、黄石公から太公望の兵書を授けられ、劉邦を支え漢の高祖の臣となったということで有名な人物です。

賢聖障子の他に張良を画いた障壁画として、参内殿の東御縁座敷にある「黄石公」という画題の杉戸絵があります。ある日、張良は老人に出会います。この老人は、自分の脱げた沓を張良に拾わせ、さらに沓を履かせるように命じます。張良がそれに従うと、後日改めて会う約束をして去ります。約束の日、張良より先にその場に来ていた老人は、張良が遅れたことに怒り、後日会う約束をして再び去ります。三回目にやっと、張良が先に来て待ち構えていると、老人はそれを喜び、太公望の兵書を授けました。張良は暇さえあればそれを読み、後に漢の名臣となりました。この兵書を授けた老人が黄石公で、杉戸絵(写真:下記左)には前段の黄石公(画面右)の脱げた沓を張良(画面左)が差し出す場面を画いています。

京都御所には、張良を画いた掛け軸もあります。(写真:下段右)巻物を持った張良の姿が描かれているこの掛け軸は、木挽町狩野家七代目の惟信によるものです。惟信は養川院などと号し、江戸時代中期から後期にかけて幕府の御用を勤めるなど活躍しました。



参内殿東御縁座敷「黄石公」画:大角南耕



掛け軸「張良」画:狩野惟信